



Himiko も bikkuri ?

秦の古墳群

70 基の真相解明に向けて

秦上沼古墳出土 三角縁四神獣鏡

平成 28 年 3 月

秦歴史遺産保存協議会

ごあいさつ

秦歴史遺産保存協議会が発足して、今年ですでに5年目を迎えました。

その間、県内の大学や専門家のご指導を仰ぎながら、総社市当局及び総社市教育委員会はもとより、多くの会員の皆様、サントピア岡山総社など地元関係者が一体となって、秦の歴史遺産をテーマに活発な保存活動と情報発信が行われてきたことに、衷心より感謝申し上げます。

この秦地域においては、わずか3キロ四方の中に、古くからの寺社など数多くの歴史遺産が密集しており、古代の先進地域ともいえます。秦の郷の歴史を振りかえることは、渡来人謎の秦氏との関係でも大きなロマンと好奇心をかり立てられ、先人たちの歴史を見ながら現代を生きる私たちに未来を創造していく力を与えてくれるような気持ちにさせてくれます。

とりわけ、約70基にも及ぶ古墳群は、今後の発掘調査が期待されるものばかりで、古代吉備の国の古代史を書き換える可能性を秘めていると言われていています。特に3世紀の秦の古墳は、卑弥呼と同時代であり、三角縁四神獣鏡が出土していることもあり、卑弥呼も当地秦の勢力を強く意識していたと察します。

このたびは、秦の古墳群をテーマに最新情報を対談、特別寄稿、随筆のかたちで取りまとめました。

この冊子発行にご協力を賜りました関係者の皆様に深く感謝申し上げますとともに、読者の皆様にとって、秦の古墳の存在の重要性の認識と今後の調査解明に向けたキックオフ宣言の熱い応援がいただければ幸いです。

平成28年3月

秦歴史遺産保存協議会副会長（秦自治会連合会会長）

片岡裕平



目 次

ページ

1. 秦の古墳群 スバリ!「新納 泉 教授」に聴く	1
対談 岡山大学大学院 社会文化科学研究科教授 新納 泉 質問者 秦歴史遺産保存協議会副会長 登森 康郎	
2. 第一線古墳調査担当者が語る「秦の古墳群の実態と今後への期待」	5
質問者： 秦歴史遺産保存協議会 会長 板野 忠司 回答者： 総社市教育委員会文化課 主幹 高橋 進一 主事 村田 晋	
3. 特別寄稿	
(1) 秦の古墳をドローンで見る	9
岡山県立大学 特任教授 横田 一正	
(2) 秦の古墳群と前方後方墳	12
総社市埋蔵文化財学習の館 館長 平井 典子	
4. 随筆	
(1) 「秦の郷古墳発掘調査に従事して」	17
板野 浩子	
(2) 謎の大ロマン＝秦の古墳群と吉備・大和	19
秦歴史遺産保存協議会 会長 板野 忠司	
付録 総社市域主要古墳分布図	【総社市教育委員会提供】

秦の古墳群 ^{にいろ}ズバリ! 「新納 泉 教授」に聴く

平成27年11月27日(金)

対談 岡山大学大学院 社会文化科学研究科教授 新納 泉
質問者 秦歴史遺産保存協議会副会長 登森 康郎



画面右手が新納 泉教授（岡山大学にて）

登森：新納先生、こんにちは。秦歴史遺産保存協議会の登森です。秦の古墳群の調査に、たびたび秦を訪れていただいておりますが、講演やシンポジウムでもお世話になっておりますが、まず、新納先生が古墳の調査研究をされるようになったきっかけは？

新納：中学3年のとき、兄にすすめられた『古墳の話』という本を読んで、埼玉県の吉見百穴という横穴墓群を見に行っただけがきっかけです。そのころは東京に住んでいました。最近、資料を整理していたら「古墳見学記録」というノートが出てきて、その日が1967年（昭和42年）5月22日だとわかりました。それから3年ほどの間で100以上の古墳を見えています。すっかりのめり込んでいたんですね。

登森：新納先生の研究のご専門は、考古学、とりわけ古墳の研究ということではありますが、端的に、考古学の研究の魅力は？

新納：遺物や遺跡など、それ自体は何も語らない資料からいろんなことを読み解く楽しみですね。他の人が読み解けないことにチャレンジする、スポーツのようなものです。考古学の資料の解釈は、ほとんどが不確実ですが、不確実なものを組み合わせていかに真実に近づくかが研究の醍醐味です。

登森：秦の古墳群調査に着手されるようになったきっかけは？

新納：一丁塚1号墳が確認されたのは、たいへんな驚きでした。そのころ、西日本の前方後方墳の分布に関心をもっていましたので、岡山県南部最大の前方後方墳だということに興味をもったのです。さらに茶臼嶽の発見で、前方後方墳を考える恰好のフィールドになったと考えています。いま、前方後方墳の設計原理を解き明かそうとしているので、その点でも魅力があります。



登森：率直に言って、「秦」という地に関するイメージ、印象は？

新納：興味深い古墳や遺跡がコンパクトに集まっていて、歴史の箱庭のような感じがします。先進的な文化を取り入れる、進取の気性に富んだ土地なのかなと想像しています。

登森：秦には一丁埴古墳、大埴古墳、茶臼嶽古墳、金子石塔塚古墳などをはじめ、60基を超える多くの古墳群が集積していますが、古代吉備の国の支配者がいたと考えてよいのでしょうか？

新納：古墳時代の吉備には各地に有力者がいて、ある時は競い合い、ある時は力を合わせていたのだと思いますが、時期によってはそのなかでもこの地域がかなり大きな力をもっていたのでしょう。支配という言葉を使うなら、支配集団の一角を占めていたということでしょうか。

登森：中でも大型古墳である一丁埴古墳、茶臼嶽古墳は前方後方墳、大埴古墳は前方後円墳と形態を異にしていますが、築造に当たって古墳のかたちには、何かの影響でこだわりがあったのでしょうか。

新納：これはなかなか難しい問題です。今でいえば仏教の宗派の違いのような感じでしょうか。朝鮮半島では北の高句麗は方墳主流で、南はどちらかというところ円墳が多い。そうした違いを源流に、それぞれ前方部を付けることで前方後方墳と前方後円墳が成立しているのだと思います。前方部は円墳派と方墳派の融和のシンボルなのかもしれませんが、それでも両者には思想の違いがあったのでしょうか。秦大埴古墳は前方後円墳ですので、こんな狭い範囲でも両者が共存していることがおもしろいと思います。

登森：古墳を発掘調査する前に3D（スリーディ）調査というのがあり、秦にもその手法を採用して調査をしていただいたのですが、3D調査というのは、そもそもどういう方法で、何がわかるのですか。

新納：三次元計測と呼んでいますが、これは古墳の表面に無数のレーザーを照射して、帰ってくる時間で位置を計測するというものです。生えている木や落ち葉も計測してしまえますが、それをうまく除去して墳丘の表面の形を描くことができます。もちろん地下までわかるわけではないのですが、地形の微妙な変化がわかるので、墳丘の斜面の段などをうまく捉えることができます。

登森：他方で新納先生のご指導で茶臼嶽古墳のトレンチ調査というのが実施されていますが、トレンチ調査とはどういう方法で何がわかるのですか。

新納：私の指導というわけではないのですが、茶臼嶽でトレンチ調査が実施されています。これは狭い範囲を発掘するもので、本来の葺石などを確実に捉えることができます。今回は、前方部の前の端に入れたトレンチで、すばらしい葺石を確認することができました。表面からではわからないことを確実に知ることができるので、やはり発掘に勝るものはないですね。それでも、いったん掘ってしまうと土層などの情報が失われるので、発掘は必要最小限にとどめなければいけないと思います。

登森：こうした秦の古墳についての調査結果で、現段階でどのような評価ができるのでしょうか。

新納：一丁塚古墳群を中心に、古墳時代を通じて前方後方墳や方墳の系列が認められ、さらにそこに秦原廃寺がつくられるという点で、非常に個性的な地域だと思います。古墳時代には必ずしも主流派ではなかったのかもしれませんが、そうであるからこそ、その次の時代にいっそう大きな力を発揮したものと思います。こうした気風があって、吉備真備のような人物が、この高梁川以西の地で育ったのでしょうか。

登森：たとえば茶臼嶽古墳については、3世紀後半の築造と推定されるとのことで、それは卑弥呼直後のことですが、すでに当時、秦は大陸や朝鮮半島の影響を受けていたということでしょうか。渡来人の秦氏の渡来も少しさかのぼるのではないかと推察されますが。

新納：その時期に吉備南部最大の前方後方墳を築いていたというのは、出雲などを通じて海外との関係をもっていたのではないかと思います。あるいは人の行き来もあったのかもしれませんが。ただ、それが秦氏につながるかどうかは、残念ながらわかりません。

登森：新納先生は、古墳の形態は出雲とか大和の影響もあると言われますが、倉敷市の弥生時代の楯築遺跡の墳丘墓ができて、まもなく古墳時代突入の初期段階にこの茶臼嶽古墳という古墳の形態が出現したとなれば、古代吉備の国を形成したこの地域が、変化する文明の受容、発信地域であったと思うのですが。

新納：楯築は円形の墳丘に突出部が2箇所つくのですが、初期の古墳は楯築の近辺ではなく備前地域や高梁川以西に築かれ、前方後方墳が多いということになります。茶臼嶽古墳に葬られた人物は、新しい時代を切り拓く最前線にいたと考えておきたいと思っています。

登森：秦の古墳群の調査に当たられての新納先生の今後のご活躍を期待していますが、こうした古墳などの歴史遺産の調査解明によって、現代に生きる私たちは、なにを学べばよいのでしょうか。

新納：どうもありがとうございます。弥生時代から古墳時代へ移行する激動の時期にこの地域の人びとが、どの勢力と手を結ぶべきかを苦悩しながら、新しい文化を求めて力強く生きていったことを、古墳を通じて見つめていきたいと思います。さまざまな変化が起こっているいま、当時の人びとに負けない斬新なアイデアで地域の活性化がはかられればと願っています。

登森：きょうは、どうもありがとうございました。

新納：秦歴史遺産保存協議会の皆様の歴史遺産保存活動、情報発信活動、環境整備活動のますますのご発展を期待しています。

第一線古墳調査担当者が語る 「秦の古墳群の実態と今後への期待」

平成27年9月2日(水)

質問者：秦歴史遺産保存協議会

会長 板野 忠司 (写真右)

回答者：総社市教育委員会文化課

主幹 高橋 進一 (写真左手前)

主事 村田 晋 (写真左奥)



(総社市教育委員会にて)

板野：秦の古墳群は、一丁塚古墳群が33基、金子古墳群が17基あり、これだけで50基、さらにこれに奥場古墳群が9基、目田古墳群4基や茶白山古墳や茶白嶽古墳を合わせると15基あるなど、70基近いものがある。山田や久代、新本にも多くの古墳があり、特に高梁川西岸の地域にこれほど多くの古墳が存在していることは、異様であるが、その存在の理由は？

高橋：高梁川以西の地域には、古墳時代でも幅広い時期の古墳が築かれています。中でも、前期の一丁塚1号墳や茶白嶽古墳、後期の金子石塔塚古墳、終末期の長砂2号墳（長砂石棺）などは、総社市域内でも特色豊かなものです。古墳時代集落の発掘例が少ないため、確かなことは言えませんが、地域の中心となるような集団が存在していた可能性が考えられます。

板野：一丁塚1号墳と茶白嶽古墳は、前方後方墳と言われているが、この形は、どこの影響を受けているのか。朝鮮半島か出雲か？

村田：前方後円墳や前方後方墳のような定型化した形の古墳は、瀬戸内海沿岸や近畿を中心とした地域の弥生時代墳墓の要素を採り入れながら、畿内中枢（大和）で成立したものとされています。

板野：一丁塚1号墳は4世紀初頭と言われているが、昨年発見された茶白嶽古墳は、3世紀後半の築造と推定されているが、その理由は？

高橋：一丁塚1号墳からは出現期の円筒埴輪、茶白嶽古墳からは二重口縁壺形土器が出土

しています。これら出土遺物の特徴と、年輪年代測定法などにより年代の特定できている遺物の特徴を比較して時期を推定しています。一丁塚1号墳は4世紀前半頃、茶臼嶽古墳は3世紀後葉頃の年代観が与えられます。

板野：近くの倉敷市の楯築遺跡は、古墳ではなく墳丘墓と言われているが、その直後に急に茶臼嶽古墳のような古墳時代初期の古墳形式になったのは、理解しがたいが何の影響か？

村田：古墳は、3世紀中頃に畿内周辺で成立したものです。以降、有力者の葬られるべき墓の形が日本列島内の広範囲にわたって統一され、弥生時代に各地でみられたような様々な墳墓の特色は、このルールของ波及とともに無くなります。吉備においても、墓を築く上でのルールが一新されたことにより、それまでみられなかった墓が造られるようになったのだと考えられます。

板野：一丁塚1号墳からは埴輪が出土したと言われ、茶臼嶽古墳からは埴輪は出土せず、弥生土器が出土したとのことだが、なぜこのような相違があるのか？

高橋：弥生時代から、土器を用いた祭祀は墓で一般的に行われていましたが、古墳時代に入ると、埴輪祭祀が成立し、各地に普及していきます。茶臼嶽古墳では埴輪は出土せず、壺などの土器が出土しています。一方、一丁塚1号墳では埴輪ばかりが出土しています。茶臼嶽古墳は埴輪の普及以前、一丁塚1号墳は埴輪の普及以後の古墳であるため、出土遺物に違いが表れていると言えそうです。

板野：秦の大型古墳の茶臼嶽古墳、一丁塚1号墳、大塚古墳の石室の有無、形状など（竪穴・横穴、石棺）はどうなっているのか。

村田：どの古墳も墳頂部の調査をしていないためはっきりとしたことはわかりませんが、横穴系の埋葬施設が普及するのは古墳時代後期になってからなので、3基とも竪穴系であったと考えられます。一丁塚1号墳については、墳頂部に建てられた祠に、蓋石と思しき石材が転用されていることから、竪穴式石槨をもつことが推定されます。

板野：不思議なのは、秦大塚古墳は前方後円墳で、ほぼ同じ時代に同じ秦の地域に一丁塚1号墳や茶臼嶽古墳の前方後方墳とが混在しているが、何が影響しているのか。

高橋：古墳の形が何を表しているのかという問いは、古墳研究の一大テーマです。葬られ

ている人の社会的地位を表すという説を筆頭に、職の違いなど、様々な可能性が考えられます。秦の古墳がどれにあたるのかわかりませんが、いずれにせよ、当時の中核であった畿内との関係の中で、このような墳形の違いが出てきたものと考えます。

板野：古墳の築造の土木技術は、渡来人（秦氏？）の影響を受けていると考えてよいか？



村田：土を盛り上げて造る墓自体は弥生時代からありましたが、巨大古墳の築造にあたっては、正確な形を造るための新たな土木技術が導入されていると考えられています。古墳自体が日本独自のものであるため、比較は難しそうですが、渡来系技術の可能性はあるかもしれません。

板野：今回の秦の古墳の調査に携わって、現場で驚いたこと、想定外のこと、新たな発見、興奮などがあれば、伺いたい。

村田：これほど古くて、特徴のある古墳の調査に携わることは、一生に一度あるかないかだと思いますので、とても光栄です。

高橋：やはり高梁川西岸の丘陵上に55m級・70m級の前方後方墳が次々と新規発見されるということは、おそらくもう二度とないことだと思いますし、その古墳を調査することもなかなか考えにくいことなので本当に幸運だと思っています。

板野：今後の古墳の調査、発掘に向けた課題や抱負などについて伺いたい。

村田：秦の丘陵には数多くの古墳があります。未調査の古墳についても、大切に保存することを前提としながら、効果的に調査を行ってほしいと思います。尾根筋周辺に発見されている以外にも古墳がないかどうか、分布調査を行う必要性も感じています。

高橋：この古墳群の調査は、完全に保存・活用を前提とした学術調査に近いものとなっていくと思いますので、私達としてもよく勉強して問題意識・問題点を浮かび上がらせていかなければならないと思います。

板野：最後に、古墳が集積する秦の古墳群を多くの方に見学していただけるよう秦歴史遺産保存協議会としても総社市の大きな宝として保存し、周辺環境の美化に努め、情報発信をしていくこととしているが、こうした歴史遺産の優れた価値について内外のより多くの人に地元秦に来て関心を寄せていただけるよう努力しているので、今後ともご協力をおねがいしたい。

村田：文化遺産の大切さを、これほど活発に地元の方々主導で伝えてくださっていることを、とても心強く、ありがたく感じております。皆様の熱意に応えられるよう頑張っ
てまいりますので、こちらこそ、今後ともよろしく願いいたします。

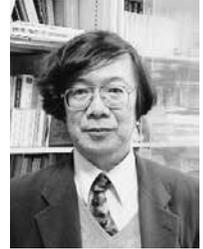
高橋：ここ秦の地で行われているような地元の方が主体となって、積極的に地域の歴史を掘り起こし、遺跡の保存・手入れ・活用を行っていただいていることは、今後の史跡保護のモデルケースの一つとなって行くのではないのでしょうか。どうぞ今後もよろしく願いいたします。

板野：きょうは、どうもありがとうございました。

秦の古墳をドローンで見る

岡山県立大学 特任教授 横田 一正

秦の古墳をドローンで空撮すると宣言すると多くの反響があった。無条件で絶賛される方からなぜドローンなのかと疑問を呈される方までさまざまであった。通常ヒトは3次元空間を意識しているが、高さについては自在に移動できないために、その認識が難しいところがある。Google Earth で衛星写真を見るとたいていは Google Maps との対応で見るので納得できるが、岡山空港に到着する飛行機から下界を見ると、ランドマークがない場所だと地理的な位置関係がいまいになってしまう。高い位置からパノラマ画像を撮影するポールパノラマという手法があるが、その画像を見ると、通常では移動できないところからの画像だけに思わず見入ってしまう。空撮画像を含め高いところからの画像はそれだけで魅力にあふれている。



ここではまず筆者の意図を説明したい。ドローンによる空撮の目的は秦の古墳のインターネットでの情報発信の一環である。情報発信するためには、発信すべき情報をいかに入手するか、またそのためのコストが適当かを考えることが必要であるが、これが難しい。

筆者は20年ほど前に鬼ノ城を初めて訪問し感激したために、当時全国的には無名に近かった鬼ノ城の情報発信を始めるために、大学の広報誌で「鬼ノ城プロジェクト」の提案を行った。これを読み賛同した人たちが何人か集まってくれた。しかし問題は発信すべき情報であった。鬼ノ城に足を運び撮影を行ったが、立ち入り禁止区域等もあり限界があった。そこで、行政側（市と県の発掘部隊）は空撮写真を含め膨大な画像データを所有していたので提供を申し入れた。しかし、空撮写真については「30分20万円弱でセスナ機を借りられるのでポケットマネーでやったら」と言われ、その他の画像データについては「公開されているものは提供してよいが、何が公開されているかは言えない」とのことだった。当時の市長と知事に直接、筆者の意図と状況を説明し、両者から情報提供の努力の約束を取り付けたが、まったく徒労に終わったという経験がある。

一昨年秦の古墳の存在を知り、初めて訪問した時、20年前の鬼ノ城訪問時と同様の興奮を覚えた。秦歴史遺産保存協議会は昨年後半から HP¹⁾ で情報発信を行っているが、本稿は違った視点からの情報発信プロジェクトの呼びかけでもあり、そこで筆者の考えている構想を述べさせていただきたい。鬼ノ城と違い、秦歴史遺産保存協議会はもともとがボランティアであり、筆者と同様に、あるいはそれ以上に情報発信を願っており、この協議会からの情報入手、共同作業は願ったりかなったりであった。考えなければならないのは、いかに魅力的な情報を少ないコストで入手し、発信できるかである。

筆者の旧研究室では、これまで鬼ノ城等を題材にしたデジタルミュージアム²⁾ や仮想

3D 空間³⁾ のシステムを構築してきた。これらの基本的な考え方はいかに手軽に安いコストで構築できるかであった。空撮を行うためにはセスナ機やヘリコプターを利用することが考えられるが、これらは高価であるだけでなく、好きなときに撮影を行うことができない。ドローンでは好きな高度での 4K 画像での撮影をいつでも行えるのは魅力である。また秦の古墳地域をコンピュータ上の仮想空間として再現することも考えている。コンピュータ・グラフィクス (CG) で行うには億単位の金額を覚悟する必要がある。筆者の旧研究室で行っていたシステムでは、鬼ノ城の道のすべてを仮想化するのにパノラマ画像 2,000 枚弱を撮影し、空間構築時間は 17 時間、数日で鬼ノ城全域を構築し、2011 年にインターネット上に公開したという経験がある。最近では手軽に 3D 動画が撮影可能になり、これだと 3 桁くらい安価に実現できる。

筆者が現在構想している情報発信のフレームワークは、

- 地理情報と地図
- 空間情報 (空撮を含む 3D 空間)
- 静止画、動画、説明
- その他関連情報

の 4 つを有機的に関連させることである。本稿のドローンによる空撮は 2 番目の一部に相当するものである。

地域を調べるのに、Google Maps、Google Street View、Google Earth がよく使用される。しかし秦の歴史遺産地域に関してこれらは精度が低く使い物にならない。右図は Google Maps で秦のサントピアの北の地図であるが山道 (古墳をたどる道) はなく、また自力で改善することもできない。Yahoo!マップなどの他のネット上の地図も同様である。精度が高い地図としては行政が持っているパスコの 2,500 分の 1 のものがあるがこれは公開されておらず、利用できないのが現状である。



そこで誰でもが自由に地図情報を利活用できるようにする OpenStreetMap (OSM)⁴⁾ というプロジェクトがある。このフリーの地図データは Google Maps に比べ精度は低い、このプロジェクトに対しては誰でもが自由に参加し、このデータを自由に編集し、利用することができるので、Google のように利用者の参加が事実上困難なものとは異なり、秦の古墳の地図を作成することができる。地図上に表示されていない山道は、OSM では自由に作成することができ、建物や遺跡、さらに説明を追加することもできる。この OSM は説明を記入する Wikipedia タウンと一緒に「オープンデータソン」として各地で開催されており、地域おこしにもなっている⁵⁾。

Google Street View はどうだろうか? OSM に対しては Mapillary⁶⁾ というフリーのスマホアプリがある。これは世界中の道を Street View 化することを目指しており、スマホ

等で静止画あるいは動画を撮影すると、それがその位置情報から自動的に OSM 上に張り付けられる。GPS は以前と異なりかなり正確になっており、筆者が実験したところ差異は無視できる程度であった。これは案内機能として利用できるだけでなく、季節ごとの撮影コンテンツを張り込んでおくことで、さまざまな風景を楽しむことができる。筆者らが構築したシステムに比べ、Mapillary は、操作性には改良の余地が考えられるが、作成の容易さに圧倒的に優れている。また最近では数万円のデジカメで簡単に 3D 動画を撮影できるので、これと OSM との位置情報を同期した連携を図ることも魅力的である。

OSM に対して Google Earth に相当するものはできないだろうか？ 現在 OSM と Google Earth との連携は多くなされているが、Google Earth に代わるシステムの提案を筆者はまだ知らないし、Google Earth は精度が粗すぎる。そこで筆者が考えているのがドローンによる空撮画像と OSM の連携である。単に衛星画像だけを使用するのではなく、ドローンのさまざまな高度からのより魅力的な空撮画像を使用することである。昨年 10 月に秦の古墳でドローンによる撮影を試みたが、ホバリングがうまくいかず失敗に終わり、今年 2 月に別の機種での空撮を予定している。空撮によってもうひとつ考えているのは、秦の古墳の地理的な意味を読み解くことである。江戸初期まであった高梁川の東流は、江戸時代の絵図と戦後撮影された空撮画像を合わせて見るとよくわかる。このような視点からも空撮を行っていきたいと考えている。

秦の古墳を何度か訪れたが、いつも「なぜこのような場所に」「なぜこんな大規模な古墳が」等々さまざまな疑問が湧き出てくる。古代吉備史の中でこれまで考えられてこなかった遺跡であり、従来の歴史を覆すものだろうと考えている。本来は行政の方でしっかり管理すべきものを、秦歴史遺産保存協議会の皆さんがしっかり整備・管理されていることに心から感謝申し上げたい。

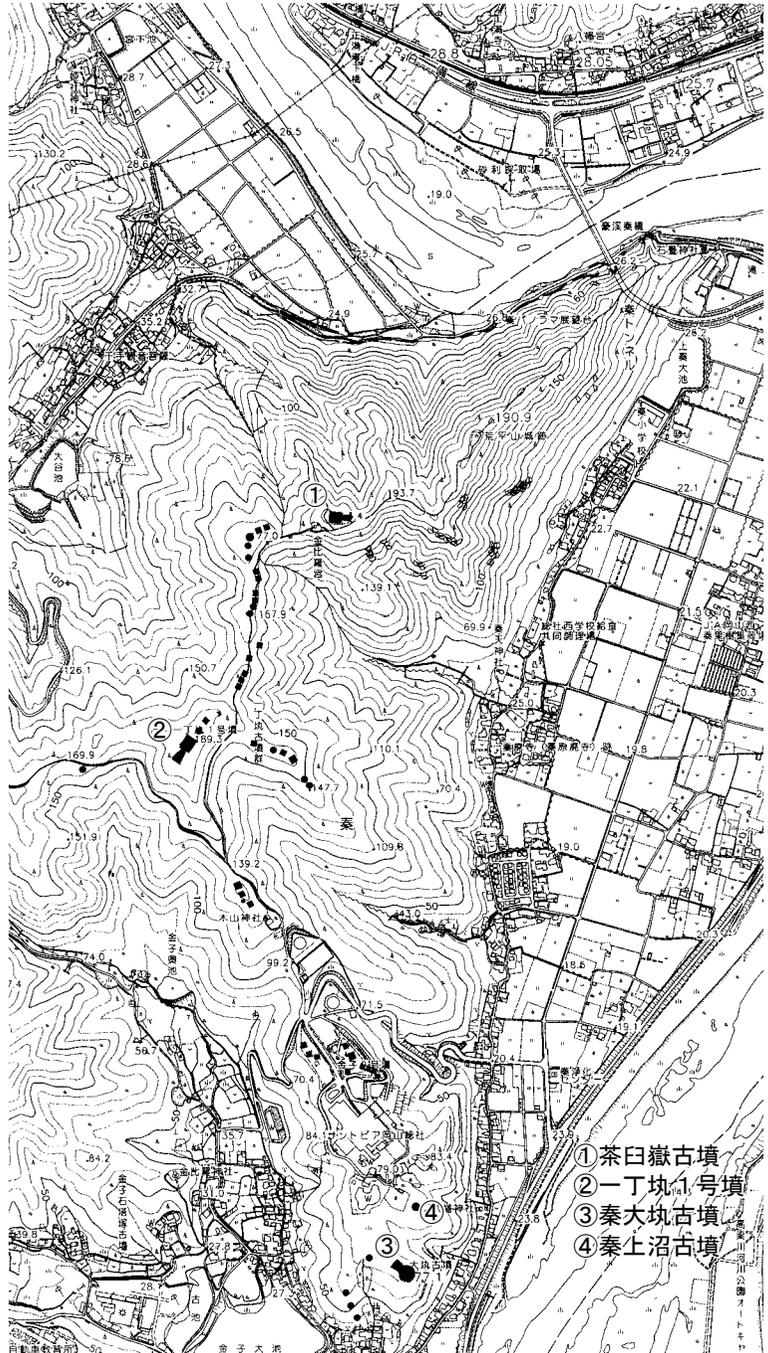
- 1) 秦歴史遺産保存協議会HP：<http://kibinosato-hada.com/index.html>
- 2) 江本,石崎,大河内,國島,横田：利用者指向デジタルミュージアムの共有化とモジュール化、日本データベース学会Letters, Vol.3, No.1, pp.137-140, 2004.
- 3) 池田, 國島, 横田: パノラマ画像を用いた仮想空間の構築, 日本データベース学会 Letters, Vol.5, No.1, pp.97-100, 2006.
- 4) OpenStreetMap HP：<https://openstreetmap.jp/>
- 5) Wikipedia タウン：<https://ja.wikipedia.org/wiki/プロジェクト:アウトリーチ/ウィキペディアタウン/アーカイブ>
- 6) Mapillary HP：<https://www.mapillary.com/>

秦の古墳群と前方後方墳

総社市埋蔵文化財学習の館 館長 平井 典子

秦地域の古墳群では、総社市教育委員会の調査によって、前方後円墳とされていた一丁塚1号墳が前方後方墳であることが明らかになりました。さらに地元、秦歴史遺産保存協議会の登森康郎氏によって新規発見された茶臼嶽古墳も前方後方墳と判明し、50mを超える前期の古い前方後方墳が2基も存在していることから、全国的にも注目されています。

これらの古墳と同一山塊上のかなり下方に秦大塚古墳という前方後円墳が存在し、出土した土器や埴輪から、茶臼嶽古墳→一丁塚1号墳→秦大塚古墳の順に築かれたものと考えられます。近接して築かれた茶臼嶽古墳と一丁塚1号墳は、どちらも前方後方墳で、同一集団によって築かれた系譜がたどれる古墳の可能性がありますが、



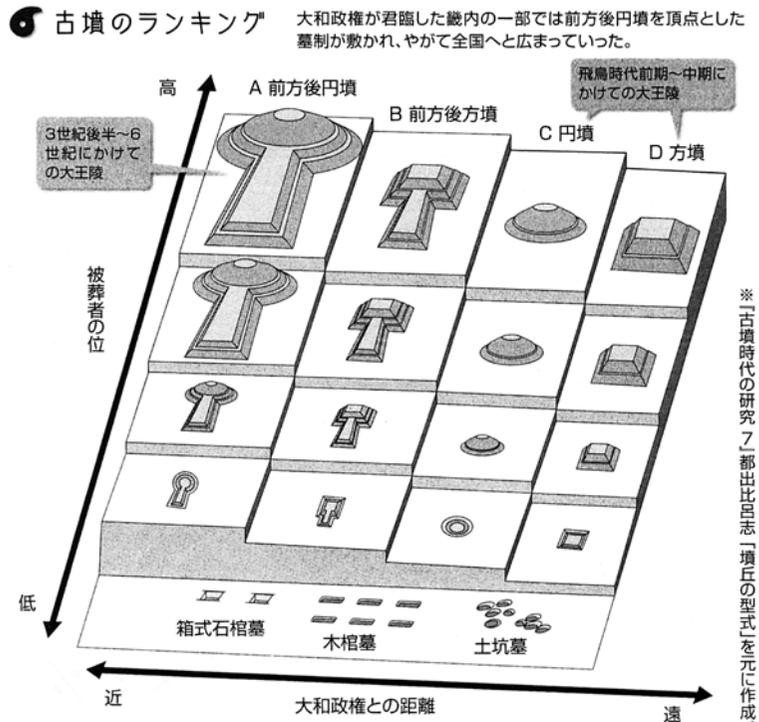
第1図 秦地域の古墳群 (S=1/20,000)

前方後円墳である秦大塚古墳が同一集団によって築造されたものかどうかは不明です。

「一番偉い首長の墓は前方後円形に造りましょう」という約束事ができたのが古墳時代ですが、古墳のランク付けは、トップが前方後円墳、次が前方後方墳、そして円墳・方墳の順となります。それぞれの中で、より大きなものがランクも上ということになります。ですから、もし茶臼嶽古墳や一丁塚1号墳と同じ集団が、秦大塚古墳を築いたとしたら、この集団の首長のランクが上がったことになり、もしそうでなければ、別の集団がこの地に新たな前方後円墳を築造したことになります。

このように、まだまだ謎の多い秦地域の古墳ですが、県内他地域の前方後方墳と比べてみるとどうでしょうか？

県内において確実に前方後方墳といえるものは、秦地域のものを含め25基発見されており、いずれも前期古墳と考えられます。美作に8基、備前に7基、備中に10基あります。そのうち美作では、91.5m（註）という県下最大規模を誇る勝央町の植月寺山古墳をはじめ、58m・56m等50m代が4基、40m代が3基と大規模なものが目立ちます。とりわけ勝央町



第2図 古墳のランキング
（広瀬和雄2015 「古墳入門」 から引用）

では、植月寺山古墳をはじめ5基の比較的大きな前方後方墳が滝川を挟んで分布しています。

備前の7基は、25m～48.3mの墳長をもっており、50mを超えるような前方後方墳は存在しません。この地域では100mを超える前方後円墳がしばしばみられ、前方後方墳との格差が大きく表れる地域といえます。

備中北部では、北房町に43mの荒木山東塚古墳、32mの小田鼻古墳の2基がみられます。特に荒木山東塚古墳は同一丘陵の頂部に、墳長63mの荒木山西塚古墳という前方後円墳が築かれています。荒木山東塚古墳→荒木山西塚古墳の順で築造されており、近接した時期の前方後方墳と前方後円墳が隣接して築造された稀な例です。

高梁川以東の備中南部では、総社市の久米10号墳（墳長32.9m、現在古墳は消滅）を除いて、備前に近い地域に集中します。その墳長も26.5～30mと、小規模なものが多く、備前地域の状況と似通っています。

そういった中で秦地域の前方後方墳は一丁丸1号墳が約70m、茶臼嶽古墳が55.4mと比較的大きなものが他の地域とは離れて2基のみ存在することに興味をひかれます。

一丁丸1号墳は、前方後方墳としては県下第2位、県南では最大規模となります。また、茶臼嶽古墳も、県内第5位、県南では第2位の規模となり、出土した土器などから、県内最古クラスの古墳と考えられます。

このように秦地域には、前方後方墳としては、県南第1位・2位の規模を誇るものが築かれているということになります。そして、現段階でわかっている限りでは、高梁川以西において秦地域にのみ前方後方墳が存在することも、秦の地域を考える上で重要なことだと考えます。

なお、勝央町や秦地域の状況を見ると、100m近いあるいは100mを超えるような大きな前方後円墳が存在しない地域に、比較的規模の大きい前方後方墳が築かれたのではないかと考えられます。

次に県外の周辺地域における前方後方墳の在り方をみていきましょう。

広島県の備後においては、前方後方墳は後期のものも含め6基のみで、その規模も35m以下です。安芸にも3基ありますが、いずれも後期の前方後方墳です。

兵庫県の播磨では9基で、前方後円墳の可能性が高い青陵山古墳が70mを測るほかは55mが1基、48mが2基存在し、残りは34.4～24.7mの規模に収まります。また摂津には、68mと36mの2基が存在するのみです。

鳥取県の因幡では5基確認されており、67mの^{ふるみ}古海36号墳を除くと残りは47m～29.5mの規模になります。伯耆は52.5mの笠取塚古墳を含め、39.3m～23mのものが4基存在します。

鳥根県、出雲においては、約43基と数多く築かれています。円筒埴輪や須恵器、横穴式石室などから、中・後期に築造されたと考えられるものが確実な例だけでも20基程度あります。最大規模は、山代二子塚古墳で推定復元長92mとされていますが、これも後期に築かれたもので、茶臼嶽古墳などのような前期古墳ではありません。前期古墳に限って言えば、50m代の墳長をもつものは、2・3基程度で、これ以外は20～30m代のものが目立ちます。石見にも1基存在しますが、これも中期以降の可能性がありそうです。

このように、前期の前方後方墳の規模や在り方からみると、美作や秦地域は近隣各県のそれぞれの地域に比べても、特異な地域といえますし、岡山県自体、前期の前方後方墳が最も多い地域といえます。

秦地域の前方後方墳、特に茶臼嶽古墳は、北及び東に高梁川を望むことができ、茶臼嶽古墳の調査指導を仰いだ広瀬和雄氏は、「高梁川の水運を掌握していた人物の墓ではないか」と述べられました。秦地域の古墳がどのような基盤の上に成り立ったものであるか、興味は尽きません。

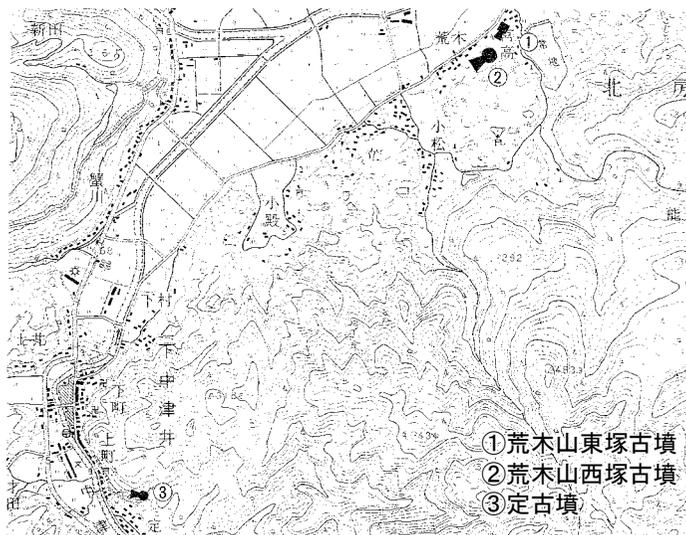
なお、高梁川東岸の三輪丘陵には、秦の古墳群と同様にたくさんの古墳が築かれており、前方後円形の弥生墳丘墓や2基の前方後円墳も築造されています。また、多数築かれた方形や円形の墳墓は弥生時代後期のものから古墳時代全時期を通して存在することが明らかになっています。

今後、秦地域の円形・方形墳の時期も少しずつ判明し、全貌が明らかになっていくと思われます。また、茶臼嶽古墳の南側下方には、幅広い尾根が存在しますので、ここにも新たな墳墓の発見があるかもしれません。吉備中山の中山茶臼山古墳に対する矢藤治山弥生墳丘墓や、時間幅は若干ありますが三輪の天望台古墳に対する宮山弥生墳丘墓のように、茶臼嶽古墳につながるような弥生墳丘墓が発見されることを期待しています。

註 古墳の形態や墳長については、近藤義郎編1991『前方後円墳集成 中国四国編』、近藤義郎編1992『前方後円墳集成 近畿編』、近藤義郎編2000『前方後円墳補遺編』を引用しています。

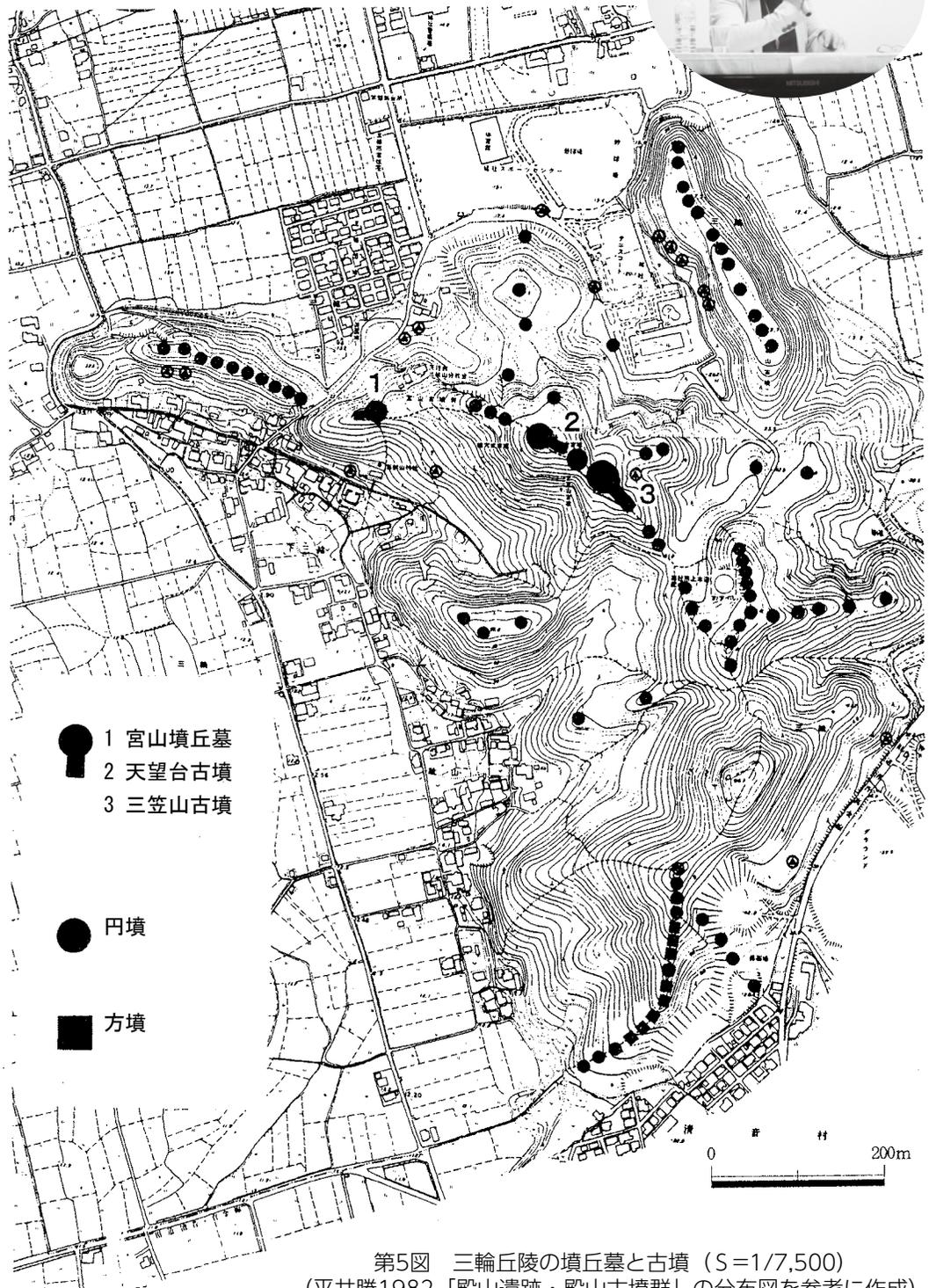


第3図 勝央町の前方後方墳 (S=1/30,000)



第4図 北房町の前方向後方墳と前方後円墳 (S=1/30,000)

※第3・4図は近藤義郎編「前方後円墳集成 中・四国編」から引用一部改変



第5図 三輪丘陵の墳丘墓と古墳 (S=1/7,500)
(平井勝1982「殿山遺跡・殿山古墳群」の分布図を参考に作成)

「秦の郷古墳発掘調査に従事して」

板野 浩子

平成23年（2011）7月一丁埴古墳群の発掘作業から参加させて頂きましたが、最初の1号墳が最も大変でした。まず、植林のために伐採され積み上げられた木々（中には大木もあり）を移動する作業から取り掛かりました。

男性の方々は暑い中での力仕事で、「熱中症」になる寸前になった方や、リタイヤされた方もおられました。時には「マムシ」や「大ムカデ」に出会いひやりとすることもありました。一丁埴頂上の日よけテント下にて休憩していると、何処からともなく涼しい風が吹き抜けて、ホットする事もありました。

雑草刈り、その後の片づけ、「古墳形状の測量」、「トレンチ」、「トレンチ溝内の石清掃と測定」、「埴輪・土器の清掃と測定」、「写真撮影」、そして「トレンチの埋め戻し」と次から次へと煩雑な作業に追いかけられました。

夏暑い日も冬の木枯らし、雪の舞う日もみんなで頑張って「コツコツ」と一生懸命作業に打ち込んできましたが、ある日突然作業中止が下される事もありました。

一丁埴1号墳は、確認調査の結果、全長70m以上の前方後方墳で県南で最大の規模であることが判明、発掘作業に参加させて頂き、とても誇りと、謎・ロマンを感じています。



一丁埴1号墳のトレンチ調査、菅石が見える

一丁埴古墳群（1号墳～33号墳）に引き続き、秦大埴古墳の清掃から測量をいたしました。

平成25年（2013）秋に「金比羅神社」のすぐ上に「茶臼嶽古墳」が発見され、長いお休みも終わり、発掘作業の再開です。

平成27年（2015）春、作業開始で倒木伐採、雑草刈りから始まり上から下へと毎日、毎日清掃を頑張りました。岡山大学考古学研究室 新納教授に依って「三次元（3D）画像」撮影の「地形測量」「現地測量図」の結果、前方後方墳で一丁埴古墳よりも古く、古墳時代の始まり、即ち3世紀後半の築造であることが判明しました。

トレンチ（試掘溝）3ヶ所から壺型土器、土器の破片が多数出たときは、ワクワクし、古墳時代にどのような祭祀が行われていたのか、古の様子を思い浮かべてみんなで歴史ロマンを感じることができました。また、この地で勢力を得た権力者はどのような人であった

のか？謎が解き明かされていくことを皆で期待しています。

一丁埴1号墳頂上からの眺望は素晴らしく、眼下には清流高梁川、緑豊かな「総社平野」「金甲山方面」「玉島港」空気が澄んでいれば「屋島」など四国の山並みが楽しめます。北には「吉備高原」の山並みが幾重にも重なって西には「鍵山」、そして古くから修験道の聖地である「正木山」が一丁埴古墳の背景としてどんと構えていることがうれしいです。



画面左側手前が筆者

春は山桜が全山を包み、鶯についてホトトギスの鳴き声が響き、夏は坂道を登ってかいた汗を一気に払ってくれる頂上の涼風、下界ではうるさい蝉しぐれも快い音楽に聞こえてきます。秋は紅葉・黄葉、冬の落葉樹の林も憂いがあります。

市の史跡に指定されましたが、今後は今以上の整備を期待し、俗化すること無く『秦の郷』を愛する多くの人々に親しまれる、歴史ロマンあふれる美しい『癒しの郷』となることを切に願っております。

予定では、平成30年（2018）までは発掘調査続行とのことです。作業を中止することなく、総社市、岡山県、各関係機関のご協力の下に継続をお願いいたします。

今よりもっと素晴らしい古墳公園として『秦の郷』の方々を始め、各方面から「四季折々」散策に訪れて頂きたいと思います。



荒平山城跡から秦の郷・総社市内を望む

謎の大ロマン=秦の古墳群と吉備・大和

秦歴史遺産保存協議会会長 板野 忠司

1 卑弥呼の時代=秦の古墳！

総社市秦では、サントピア岡山総社（旧厚生年金センター）の周辺に一丁塚古墳群33基に引き続き、茶臼嶽古墳が発見され、従来から確認されていた金子古墳群17基、それに奥場西・奥場北古墳群等を合わせると大小含め約70基の古墳が集中的に存在する。とりわけ前方後方墳の一丁塚1号墳（4世紀前半、全長70m＝平成27年12月21日岡山県史跡指定）と茶臼嶽古墳（3世紀末、全長58.3m＝平成26年発見）、前方後円墳の大塚古墳（4世紀、全長63m）の3基は、大型古墳であり、本格発掘調査は、これからだ。わずか3キロ四方の秦に、これほど多数の古墳が存在することは、何を意味するのか、明確な答えは未だ出ていない。

これらの中でも茶臼嶽古墳は、岡山大学考古学研究室と総社市教育委員会によるトレンチ調査の結果、葺石や出土した弥生式土器等から前期古墳時代（3世紀後半）の築造と発表された。3世紀といえば、まさに邪馬台国の女王卑弥呼（247年頃没）の時代であり、卑弥呼も当地秦の勢力を目の当たりにしていたはずだ。

卑弥呼といえば、奈良県纏向遺跡の発掘により、奈良県桜井市の箸墓古墳が卑弥呼の墓とする有力説もある。しかし、未だ卑弥呼の治めた邪馬台国が倭国のどこにあったか確定はしていない。畿内説

（大和説）か、九州説か、さらには九州にあった邪馬台国が大和に東遷したとの説や吉備の国にあった邪馬台国が大和に東遷したとする説など、学説は多様にある。いずれの学説にしる、当地秦を含む岡山県内の吉備の遺跡、古墳などから、3世紀にはすでに畿内（大和）に匹敵する「吉備王国」ともいう大勢力があったことは事実である。古代吉備が楯築墳丘墓（倉敷市庄）に続き古墳形態に発展をしたような初期古墳時代の古墳が秦から発見されたことは、3世紀、この吉備王国と同時代の邪馬台国（卑弥呼）が共存していたこととなり、両国はお互いの存在を対等に認識し、交流していたといえよう。



2015. 5. 14 山陽新聞

2 卑弥呼＝三角縁四神獣鏡なら、秦からも出土

西歴239年に魏の明帝から「親魏倭王」の称号と鏡100枚を授かったと魏志倭人伝にある。中国の最初の皇帝はBC 3世紀の秦の始皇帝だが、その後中国が最初に認証した日本の王「倭王」は、女性であった。今日でさえ男女共同参画が叫ばれているが、魏の皇帝はなんとしやれたことをやってのけたものか。

その卑弥呼が授かった鏡とは、三角縁四神獣鏡といわれている。三角縁四神獣鏡は、これまでに日本では約5百枚が出土している。卑弥呼の時代以降も大陸との交流は続いたと考えられ、その後も秦氏や漢氏の渡来もあり、また、それにより鏡の製法技術も伝来したとすれば、5百枚の出土は不思議ではない。むしろ、中国から出土してないのが不思議と考えられていたが、最近、中国（河南省洛陽市）からも三角縁四神獣鏡が発見されたとのことで、この鏡は卑弥呼が魏から授かったものに間違いのないようだ。我が国から出土した三角縁四神獣鏡は多い順に、奈良県での120枚を筆頭に、京都府、福岡県、兵庫県、大阪府、岡山県と西日本に集中している。卑弥呼畿内説をとる人は、この鏡が奈良県から多く出土していることを理由の一つとしている。三角縁四神獣鏡には中国製と日本製があると見られていたが、その区分も最近の研究では曖昧なようだ。平成27年10月、岡山では、三角縁四神獣鏡を描いた江戸時代後期の古文書が発見され、操山109号墳（岡山市）のものともみられており、実物はなくともこの吉備王国に卑弥呼と関係深いこの鏡がさらに存在していたことを裏付けるもので大きな話題となっている。

実は、この三角縁四神獣鏡が秦の上沼古墳からも出土している。岡山県立博物館において開催された「発掘された日本列島2015」において、総社市出土として展示された。その吉備の国の中でもさらに先進的な役割を担った秦こそ、卑弥呼勢力とのかかわりがあるといえるのではないか。さらに言えば、秦と卑弥呼とのかかわりを解くカギ、それは秦の古墳調査にあるのではないか。今後、未発掘の秦の古墳群の本格発掘調査が行われれば、三角縁四神獣鏡の出土した秦の上沼古墳に近い多くの古墳から、この鏡がさらに出土する可能性がある。行政による早急な秦の古墳の本格発掘調査が強く望まれるところである。

3 大陸との交流＝卑弥呼と秦氏渡来

卑弥呼の時代からすでに大陸との交流があったことは、魏志倭人伝により確かな事実だ。我が国の古墳自体も中国や朝鮮半島の影響を受けているといわれている。岡山大学大学院の新納泉教授は、秦の「茶臼嶽古墳と一丁垧1号墳は連続した首長墓と考えられる。渡来系の特徴があり、先進技術を呼び込んでいたのだろう。被葬者は西日本でも目立った存在だったのでは」（平成27年1月7日山陽新聞）と、コメントされた。渡来系の特徴とは、秦氏であり、漢氏ではないか。従来、秦氏の渡来は4世紀末～5世紀との説（「秦氏の研究」大和岩雄）が大勢を占めていたが、大陸からの渡来人の渡来は、もっと早くからではないかという見方も有力だ。秦には、すでに弥生時代から「源ハタ氏族」が居たともいわれる。（古代吉備国を語る会佐藤光範）秦氏の「弓月の君」が一度に渡来人を連れてきたのでは

なく、何年もかかって、その前後から何万人もの者が徐々に渡来し、文字や機織り、土木技術を伝え、日本民族の基礎を形成したとみるべきだろう。

卑弥呼と大陸との関係や秦氏の渡来との関係についても、長期的な大陸との交流の一環の中でとらえてみるべきだろう。いずれにしても、当地秦と秦氏の関係は、随所に見ることができるし、秦の古墳の形態等が大陸の影響を受けていることも

当地「秦」と「秦氏」の関係推測（筆者）

- 一 秦氏の「氏寺」ともいわれている広隆寺の瓦文様と秦原廃寺（飛鳥時代）の瓦文様が酷似
- 一 和妙抄など当地に「秦」という地名が付せられた古くからの由来
- 一 古くから磐座を（神体とする麻佐岐神社と石畳神社の2つの式内社が秦に存在（磐座信仰の秦氏）
- 一 技術集団の秦氏として、大陸からの銅、鉄の技術伝来の痕跡が多く存在すること（姫社神社他）
- 一 渡来系の古墳築造の土木技術の現れ及び旧十二カ郷水井堰技術が秦氏の京都桂川の井堰に類似
- 一 八幡神社で有名な秦氏の八幡神社が秦の古墳群の集中する山の上にあった事実（現在は山の下に移築）

渡来系の土木技術の現れといえるのではないでしょうか。

4 卑弥呼＝畿内（大和）政権としても、その前段階で吉備は？

歴史作家関裕二さんによると、初期の大和政権の確立に関わる物部氏の饒速日命（ニギハヤヒノミコト）は、どこから大和にやってきたかについて、九州や出雲からではなく、吉備からと説明されている。（平成27年12月6日ピュアリティまきび講演）そして、その正体は、吉備＝物部氏であったわけで、大和政権の中心に立ち続けたのが吉備であるとの見解だ。ニギハヤヒの命は、神武東征以前にヤマトに降臨していたことを日本書紀がみとめており、平城京遷都（710年）まで政局を動かし、政権の中枢に立っていたという。仮に卑弥呼畿内説をとっても、吉備なくして大和政権は存立してないことになる。温羅伝説も吉備津彦命の話も大和政権の樹立が前提だが、楯築墳丘墓やその直後の3世紀の秦の古墳の存在は、卑弥呼（大和）政権に先行又は独立併行して、吉備の国独自の文化圏形成により築造されたのではないかと推察できる。その吉備は、3世紀の古墳にみられるように大和の影響というよりも、新納泉教授のコメントのように、それ以前に大陸や朝鮮半島の影響を受けていたのではないのか。もしそうなら、国内論議にあるように、時代の異なるその後畿内に築造された前方後円墳の大きさと比較したり、前方後方墳が前方後円墳より下位に格付けされるという説明は、いかがなものか。3世紀、秦は吉備の国でも先進的役割を果たし、卑弥呼（畿内説）に従属していたのではなく、畿内よりも先に大陸の影響

を受け、または畿内と深い競争関係を構築しながら併存的に、吉備独自の文化圏が形成されたのではないか。卑弥呼東遷説や秦氏自体の東遷説、さらにはニギハヤヒ命吉備説にあるように、むしろ畿内（大和）の形成の前段階で吉備が寄与し、その文化が東遷していったという方が説得力あるのではないか。いろいろな推理が働くが、卑弥呼は当地区の盟主の勢力にbikkuriしたのか、それとも熟知していたのかと問われれば、同じ3世紀であることから、熟知していたというべきではないだろうか。

当地秦と古代史について、聡明なる読者の皆様のご教示、ご批判をいただければ幸いです。

① 邪馬台国と吉備

女王卑弥呼がいた邪馬台国は、どこにあったのか？ 古代史最大の謎といわれる邪馬台国の所在地をめぐる、現在では畿内と九州だけでなく、日本列島各地に候補地があげられ、論争が続いています。

これまでの考古学研究により、邪馬台国が存在したのは弥生時代終末期から古墳時代初頭にあたる、西暦3世紀を中心とする時期であることが明らかになっています(2)。

本特集では、畿内と九州の中間に位置し、邪馬台国の時代に独自の地域文化を築いた吉備の実像を、考古資料を通して紹介するとともに、邪馬台国との関係を探ります。

※畿内-山城・大和・河内・和泉・摂津の5か国



1. 特殊器台(重要文化財)
宮山墳墓群(総社市)
岡山県立博物館蔵

2. 邪馬台国の時代 歴史年表

時代区分	西暦	中国の歴史書に記された後の主な出来事
中期後半	紀元前1世紀頃	倭は100余国に分かれ、その一部は前漢の楽浪郡と交渉する
	57年	倭の奴国の王が後漢に朝貢、「漢倭奴国王」の金印を授かる
後期前半	107年	倭国王帥升らが後漢に朝貢、生口160人を献上する
	2世紀後半	このころ倭国乱れ(倭国大乱)、卑弥呼が女王に共立される
終末期	239年	卑弥呼が魏に朝貢、魏職使王に任じられる
	240年	卑弥呼が魏から銅鏡100枚などを授かる
	243年	卑弥呼が再び魏に朝貢する
	245年	倭の使者(曹芳)が魏から貴種を授かる
古墳時代	247年	卑弥呼が倭国との交渉を魏に伝える
	248年	このころ卑弥呼死す
初頭	266年	後継者の台子が魏に朝貢する
		倭王(台乎?)、西晋に朝貢する

3. 邪馬台国への道のり



② 邪馬台国への道のり

現在の岡山県と広島県東部は、かつて「吉備」と呼ばれていました。その原型となる文化的なまとまりは弥生時代に形づくられたと考えられ、邪馬台国の時代には日本列島有数の地域勢力であったことが、吉備独自の祭器である特殊器台(1-13)をはじめとする様々な考古資料や発掘成果によって明らかになっています。

中国の歴史書「三国志」の中のいわゆる「魏志倭人伝」には、当時「倭」と呼ばれていた日本列島にあった邪馬台国への道のりと、主要な国々が記されています(3)。邪馬台国畿内説では、その一つ投馬国を吉備または出雲にあてる意見が有力です。また、近年では、邪馬台国は吉備にあり、のちに畿内(大和)に移ったとする吉備邪馬台国東遷説も提唱されています。



発 行

秦歴史遺産保存協議会

会 長 板野忠司
副 会 長 登森康郎 片岡裕平
事務局長 小橋武史
会 員 数 335名 (平成28年3月)
入会案内
連 絡 先 片岡裕平 0866-95-8206
小橋武史 0866-95-8156
発 行 平成28年3月

※当冊子は、公益社団法人 福武教育文化振興財団のご支援により作成いたしました。